

第三章

清暁（せいぎょう）

興（きょう）

に因（よ）つて来たる

青巖庵で三人が別れて一年ほど経った景竜二（七〇八）年秋。

夜明け前に目覚める。すぐに外に出ると、まさしく願っていた通りになっている。昨日の昼に雨が止み、こうなるうかと期待した。

星影は淡い。東の空に細い月が滲む。風はない。土と草の匂いが立つ。歩み出すと程よい冷気が胸に入る。これぞ絶好の日。

慣れた道を進むうちに白み始める。音もなく霧が立ち昇り、星の光を消す。ぼんやりと見えるともなき岷山の山裾を回る。遠く近くに鳥が鳴き交わし、どことも定まらぬ彼方で人の声が低く響く。

時は暁から明け方へと移り、霧は切れ切れに漂う。月は薄れ、東の空が明るくなる。孟浩然は足を速める。この稀な日を惜しまねばならない。

小さな流れを渡る。ここから水に沿って遡ると石潭（せきたん）に至る。しばらくの間、毎日のようにそこに通っていた。今朝は行かない。

石潭は、雑然とした林の中にあるさほど広くもない池だ。天気の良い昼間に斜めに水面を覗くと、水の中の石碑が見える。文字は摩耗して読めない。その碑のあることから沈碑潭とも呼ばれる。他にこれといった見どころはなく、訪れる人は稀だ。雲表觀主に二度と来るなと言われてから、しばらく間、池の畔で一人黙々と剣を振るった。

顔五と張人が青巖庵を去った嵐の日に、山中で一筋の道を見た。顔五は世を捨て、張人は官人になると決意した。孟浩然も張人と同じようにするのが、生まれながらに定められていたことであり、魏元忠の舟を見送ったときに強く心に決めたことでもあった。

それと同じときに、孟大は南園に生きると決めた。孟大の背に付いて行きたいの思いは強かった。近頃の孟大を見ると、それもまた自分にできるものではないと思える。何十、何百という人間が狭い場所で顔を突き合わせて

いれば始終何かがある。かつて則天武后が皇后の地位を得てさほど経っていないころに、夫の高宗皇帝とともに、泰山（たいざん）で封禪（ほうぜん）の儀を行く旅に出た。寿張という村を通った際に、張公芸（ちょうこうげい）の屋敷に立ち寄った。張公芸の一族は古くからそこに住み、このころは一族の世代を上から下まで数えて九世にも及んだ。皇后と皇帝はこの稀有な一族を顕彰し、長く結束を保って来た秘訣を尋ねた。張公芸は「忍」の字を百余り書いて差し出した。孟大は、その「忍」を自ら進んで引き受けたのだった。

嵐の山中で見た一筋の道は、いわば心身の錯乱状態が生み出した幻である。うと、孟浩然是解釈した。雲表觀主に破門され、顔五のようにもなれず、張八のようにもなれず、孟大のようにもなれず、ならば全く別の道があると思いたくて、その幻を見てしまったのだ。

しかし、幻は幾度となく目の前に甦る。それを消し去ろうとするのは、幻の意味するところがわかっていからだ。もしも幻の道があるとするならば、詩というものに導かれて普通とはおよそ異なる心持ちになって歩んで行くも

のであろう。誰かがかつてそのような道を通ただろうか。詩は人にとって大切なものだ。身を削って詩を詠んだ人も多い。人は詩だけで生きられるのではない。まず人として生きて、思いに余るものがあつて詩が生まれる。

なぜ、詩なのか。あの日に顔五や張人と七賢人の詩について話をした。もとより詩には慣れ親しんでいる。手近に詩があるから、それによつて生きる道があると夢想してしまつたのだろう。そもそも詩が何であるかを自分は知っているのか。それもわからずに幻を見たのは、心が弱いからだ、雲表觀主のもとには行けずとも、心を強くするために劍の稽古に打ち込もうと石潭に通つた。

池に通じる道を一瞥すると、そのころの重い気分が思い出される。今朝の自分は違はずだ。孟浩然はそこを通り過ぎる。

東の空が白く輝き、日の出が迫る。習池（しゅうち）の堤に立つ。少し遠回

りになっても大概はこの池に寄る。急いでいる今朝も、池を見ずにおくのは惜しい。

習池は高陽池ともいい、魚を獲る池で、数百年の歴史がある。後漢の時代に襄陽公であった習郁（しゅう いく）が穿ったのが始まりだ。そのころは池の中央に池北亭という名の釣台があり、池を巡って松と竹が植えられていた。いずれもいまは存在しない。それでも水面に岷山を映す風光の美しさから、風雅の士にも愛され、漁夫ばかりでなく、訪れる人が多い。朝早いいまはさすがに人影はなく、その代わり、多数の鴨が浮かんでいる。

霧の最後の名残が淡い渦を巻き、遠くの鴨の一团を包んで、そのまま消し去ってしまうかのように見えたとき、一条の光が差し込む。水の色が一変し、鴨は姿を取り戻し、水面から飛び立つ。池が活気づくとともに、孟浩然の心も動き出す。

今日のこれからを鴨はどのように過ごすのか。空に昇る鴨と、堤に立つ自分。互いに心の内は知れるのか。鳥も人も天より命を授かった。ならば通じ

合えるのか。我が身はここにあり、心は鳥となって空を翔け行くのか。鳥は天の定めのままに生きている。人には余計な知恵がある。

かつてこの池に、山簡(さんかん)さん かんが来ては前後不覚になるまで酒を呑んだ。

山簡は竹林の七賢人の山濤の息子だ。嵇康から絶交状を送られた山濤は、嵇康のように権力者に殺されることなく、己を保ちつつ国家の重要な仕事を成し遂げた。息子の山簡も父のようになるのが期待された。地方官としての実績をまずは積むべく襄陽に来た。当時、国は北方から異民族の圧迫を受け、重大な局面を迎えつつあった。とりわけ襄陽には危険が迫っていた。五百年前にここで酔った山簡の心は知れるのか。

鳥と山簡と自分。そしてあの幻の一筋の道。この絶好の日は、恐れを払拭するために巡って来たのか。

— 条の煙が、草葺の粗末な小屋より、ゆらゆらと昇っている。

秋のまたとない朝に行くと言つてあつた。まさしく今日だとわかっているはずだ。

この界限で張野人（ちやうやしん）と呼ばれている漁夫が棲む。排行は五であるらしいが、名は知らない。時に雇われて畑仕事もし、漢水名物の鰻魚（へんぎよ）を獲るのを最も得意とする。竹柴で編んだ仕掛けを、他の漁夫の知らぬ場所に沈め、ごく上等のものを獲る。首筋に人を驚かすに足る醜く大きな傷痕がある。それに、字を識る者として一目置かれ、他の漁夫は遠く敬して近寄らない。

見るからに胡乱な男である。南園で学舎に通うような子は張野人との接触を禁じられている。張人は張野人とかねてからの知り合いで、青巖庵に棲んでいたところに、一度だけ連れられて張野人の小屋を訪れた。禁じられた相手であるから少しばかり興味があつた。間近にすると、やはり首の傷痕が強烈だつた。声は、風貌に似ず、妙に甲高く、張人を相手に、何やら辻褃の合わないことをやたらと並べた。張人は張野人を「叔父貴」と呼び、山にいると

きより快活で、二人のやりとりは不可解だった。

張人は張野人に向かつて、連れて来たのは南園の孟浩然で、このごろは岨山で劍の修練をしていると告げた。張野人はいきなり孟浩然の右肘を掴み、「この腕で蛟竜を切れますかな」と、舌を鳴らしながら言った。この不気味な男に負けたくない気が俄かに生じ、孟浩然は、「いま直ちに水に飛び込んでみせましょう」と答えた。

張野人が言ったのは、古の鄧遐(とう)かの故事だ。かつて漢水の兩岸には、南園のあたりも含めて広大な湿地が広がり、人を害する蛟竜が潜んで、誰も住めなかった。鄧遐は襄陽太守として赴任して蛟竜の害があると聞くと、即座に抜劍入水して患いを除いた。

孟浩然が張野人の腕を振り払って劍を握ったのを見て、張人は意外そうな顔で、「蛟竜の正体も知れないのに、いきなり水に飛び込むようなことを君はするのですか」と言った。孟浩然は咄嗟に「正体が知れない間なら、まだしもできるような気がします」と答えた。「君はときたま乱暴なことを言う。や

はり阮籍なのでしよう」と笑い、青巖庵では、孟浩然は阮籍に比せられていると話した。「ほほう、阮籍とはまことに恐れ入りましたな」と、張野人は手を叩いて笑った。

その翌日、霍大叔母に呼び止められ、「何かい、あのろくでもない魚とりのところに、出入りしているのかい。おまえのためにならない。南園の恥にもなる。これきりにしたがいい」と注意された。誰がどこで見て告げ口をしたものか、不愉快だったが、張野人の人を小馬鹿にしたような笑いが面白くなかった。大叔母に言われるまでもなく、また行く気はなかった。結婚話で片意地を張って日が浅いころでもあり、「はい、これきりにします」と素直に従った。大叔母はやや拍子抜けした表情で、「そうかい、そうかい、そうしてくるのかい。よい子だよい子だ、ほっほほ」と笑った。その後で孟大に会うと、「君に考えがあるのなら、俺はいいと思うのだが」と言われた。特に考えなどはなく、小屋には行かなくなつた。

襄陽には幾筋かの張家がある。張八と張野人は何かしら遠いつながりがあ

るらしいが、張八も確かなことは知らない。張野人の首の傷痕はどこかの獄で拷問を加えられたもので、張野人はそれで素性を伏せているのだらうと、張八は言った。張八の父も、息子が張野人の小屋に行くのは好ましく思っておらず、ただ息子に甘い父として、何事も容認している。

張八の父は、以前はお上の御用を請け負い、なかなかの財産を築いた。羨んだ誰かに小さな咎を密告され、その仕事を失った。いまでは襄陽一の神童と評判を取った息子が一日も早く貢挙に合格するのをひたすら願い、息子が望めば何でもするのだった。

張八の本名は張子容（ちようしよう）という。張子容は青巖庵を出てすぐに地方の予備試験である解試を受けた。父はここぞとばかりに町の有力者に様々な働きかけをした。その甲斐あつてか、実力通りであつたか、張子容は都の本試験を受ける資格を得た。しかし、張子容は父のそのような行為をかねてから快く思っていなかった。

襄陽の張氏で天下に最も知られるのは張東之（ちようかんし）の家だ。かつ

て魏元忠が張兄弟と争つて遠くに流された後に、則天武后は朝廷の顔ぶれを見て、居並ぶのはいずれも媚び諂う者ばかりで、国家の大事を託せる人物がないことに危機感を抱いた。気骨ある人物として張柬之を大抜擢して宰相に据えた。張柬之はすでに八十歳に達していた。張柬之は則天武后が見込んだ以上だった。宰相就任後一年にして、武力による政変を起こし、則天武后を皇帝の座から引きずり下ろした。張柬之は大事を成し遂げると、則天武后の一族を一掃する荒療治まではためらい、穩便に事を運ぼうとした。その隙を衝き、武一族は韋皇后と結びついて猛烈な巻き返しを図った。張柬之は政争を避けて襄陽に帰った。武一族はそれでは気がすまず、張柬之を遠い南方の地に流し、一族を公の場から追放した。高齢の張柬之は流された先で没した。

張子容の父は、同じ襄陽の張姓ではあっても、張柬之の家とは一切関わりがないということをごとさらに強調し、息子がいずれ受けることになる都での試験に備え、町の有力者を通じて都の権威者に取り入ろうと、あれこれ工

作を進めた。張子容は張柬之を尊敬していたから、父に對する不満を強めた。都での本試験に向けて襄陽を發つ日が迫るなか、ふとしたきっかけで父子間で一悶着となり、張子容は張野人の小屋に駆け込み、結局、そのときは都に行かなかった。さらについてこの間の夏にも、張子容は家を飛び出して張野人の小屋に走った。その張子容を連れて張野人は南園に忍び来て、「お坊ちやまを頼みます」と孟浩然に託した。

その少し前から、孟浩然は張野人の小屋にしばしば通うようになっていた。きっかけは、石潭でのある日の劍の稽古だった。春から夏に変わるころに、稽古はすっかり行き詰まっていた。雲表觀主のもとに通っていた時分から稽古はうまくいかなくなっていったから、一人で打破できるものではなかった。池に来て、劍を投げ出し、水中の石碑を見入るだけであつた。

背後に足音が聞こえた。心を集中させているつもりでいたので、振り返るまいとした。そのように意識すると余計に気になり、我知らずに後ろを見た。山の奥へと遡って行く張野人の背中が木の陰に消えるところだった。ならば

気にするまでもないと、沈碑にまた目を注いだ。しばらくすると、張野人の後を追っていた。

いまだ踏み入れたことのない小さな滝の下に張野人はいた。その背が見えたところで足を止めた。どうどうと水の音が響いていた。釣り糸を垂らしているらしい張野人には、自分が来たのは知れていないと思ひ、じつと様子を窺った。どうしてそうするのか、自分でわからなかった。

張野人の高い声が聞こえて来た。

石浅水潺湲　石が浅く見えて、水はさらさらと流れ

日落山照曜　日が落ちて、山はきらきらと輝きます。

よく通る声だ。張野人の即興の句かと思つたが、滝の水は「潺湲(せんかん)」というよりは音高く、日は落ちるのではなくまだ朝だった。

張野人は魚を釣り上げ、

目睹巖子瀬　目で巖先生が遊んだ瀬を見ては

想属任公釣　任公の釣にあやかりたいと思うのです。

ようやく謝靈雲の詩だと気付いた。即座にわからなかった自分を恥じた。褚先生の学舎において、謝靈雲の詩は鮑照の詩と並んで必ず覚えなければならぬ手本とされている。二人は竹林の七賢人よりも後の人で、南北朝時代の詩を代表する双璧だ。詩句にある巖先生も任公も古来有名な隠者だ。

謝靈雲の詩なら自分こそがよく知っている、張り合わねばいけない気分になぜかあった。孟浩然是続きを吟じた。

誰謂古今殊

誰が昔と今とは違うと言うのでしょうか

異世可同調

世は異にしても、調べは同じであるのでしょうか。

張野人は体を回し、手招きした。近くに行くと、「代わりに釣っていてくれませんか」と竿を渡された。糸を垂らすと、張野人は柴を集めて火をおこした。孟浩然是一匹も釣り上げられなかった。張野人が焼いた魚は美味だった。なぜ謝靈雲の詩なのか問おうとすると、「意はすでに尽きましたな」と遮り、山を下った。

謝靈雲は陶淵明より二十歳ほど年少で、やや似た運命のもとに生まれ、全

く異なる死に方をした。二人とも祖先に赫々たる武勲を挙げた人物がいた。程度の差こそあれ、衰えつつある家を再び興したいとの志を胸に成長した。陶淵明が念願の役人になったもののすぐに辞めて郷里に帰ったところ、謝靈雲は初めて仕官した。陶淵明よりは遙かに高い地位であった。謝靈雲は幾度か挫折しつつも官界に身を置き続けた。陶淵明が郷里で静かに没したところ、謝靈雲は行き詰まりを感じてついに政界から退いた。その後、謀反の疑いをかかけられて刑死した。二人とも優れた詩を残した。陶淵明は田園詩といわれ、謝靈雲は山水詩といわれる。田園には人がいて、山水には人がいない。

張野人はなぜことさらに謝靈雲の詩を吟じたのかはわからなかったが、劍の稽古が頓挫し、一筋の道が幻で、褚先生の学舎は息が詰まる場であるのならば、張野人の小屋に行ってみる他はなかった。張野人は孟浩然を舟に乗せ、釣りの手ほどきをしてくれた。謝靈雲の詩については語ろうとしなかった。霍大叔母に「あの約束は何だったのかい」と注意された。くどくど言われ、かえって足繁く通うようになった。「やはり、こうなったのか」と孟大は笑っ

た。

小屋の内をのぞくと、竈の前に張野人が陣取っている。

「やあ、来られましたな。間もなく飯が炊き上がります。ほんの少しお待ち下さい」。

振り返らずに言う。首の傷痕はもう見慣れた。

火加減を調節してから、張野人はゆっくりと立つ。

「やはりお一人でしたか。お坊ちやまにはお知らせしなかったのですな」。

「張君にはまだ何も告げていません」。

「難しい際にいらっしやるようです。お坊ちやまを気にかけてくださり、ありがとうございます」。

張野人は頭を下げる。張野人は張子容のこと「お坊ちやま」と呼び、このころは孟浩然のことを同じように「坊ちゃん」と呼ぶ。

「張君は僕と違つてしっかりしています。友のために、僕にできることはこれといつてないように思っています」。

家を飛び出して南園に連れて来られた張子容が、「こんなことなら五郎君と一緒に行けばよかったです」と嘆いたときにも、孟浩然是助言らしきことは何も言わなかった。張子容は自分で考え抜いて決める男だからだ。顔五の消息はその後は何も聞こえて来ず、峨眉山に向かったのではないかと推測するだけだった。仙界を求める顔五と同じ行動を取らなかつたのを張子容が本気で後悔しているとは思えなかつた。翌朝になつて孟大が、「こうしてあげた」と、君の考えることがあるのなら、何であれ手助けしようと思ふ」と、言つてくれたときも、「張君は自分で決めるでしよう」と答えた。その日のうちに、張子容の父親が取り乱した様子でやつて来た。誰彼構わずに頭を下げ、「私が悪かつたのです。どうか息子の気持ちを宥めてやつて下さい。早く家に戻つて来るようにしてやつて下さい」と懇願した。張子容はそのような父の姿に自分から帰つて行つた。

「お坊ちやまも、坊ちゃんのように、柳に風と受け流せるくらいであればよろしいのですが、お坊ちやまときたら、風に真正面から当たっていいこうときれますからな」。

「僕が受け流しているように見えますか」。

張野人は微笑み、

「違いましたかな。見かけと異なるのは、誰にでもあることですからな」。

「叔父貴だつてどうだかわかりません」。

「あつしは、襦袢を纏つたこの見かけ通りの襦袢な男です。どこかであつしが死んで、この襦袢が残つたのを見て、まさかこれを人が着ていたとは誰も信じないでしょうな。襦袢に見合つた襦袢の塊がこのあつし、見かけのままです」。

「叔父貴の本当のところはさっぱりわかりません。南園では、僕は、叔父貴が言う通り、風任せで好きにしていると見られているようです。本当にそうありたいという気持ちもあります。でも、張君のように、自分で納得するま

で深く考えたいと思っっているのです。僕にはそれが苦手です」。

「あつしなぞは、深くも浅くも、そもそも考えもせず、ただぼんやりと、昨日と同じ今日を過ごすばかりですな」。

「考えずに、昨日と同じ今日が送れるのなら、それほど結構なことではないのではありませんか」

「昨日と今日が同じだとわかればまだしもですな。それさえわからずに、こちらの石ころと同じく、ただころがっているだけです」。

「いっそ石になりたいものです」。

「石になったらなつたで、それなりの苦しみはあるでしょうな。石にならねばそれはわかりません。石ではない我等は、常に飯の心配をせねばなりません。そろそろよい加減に炊き上がって来ましょう。舟は用意をしておきましたから、先にお越しいただきましょうか。おっつけ参ります」。

孟浩然は裏手の水路へと回る。

水に浮かぶ一艘の小舟は、張野人の唯一無二の財産である。普段は小屋の

内に納められ、使うときに、筵の上を引きずって水路に運ぶ。今日はその舟で漢水を渡り、対岸の鹿門山に分け入ることになっている。その気になればいつでも登れる山ではあるが、龐徳公が最後に入った山であるだけに、この日にこそという時を選んで張野人ともに行くと決めていた。

鹿門山は、旧くは蘇嶺山と言った。習池を穿った習郁が山頂に神祠を建て、二頭の石の鹿を刻んで神道の口に置いた。それで神祠を俗に鹿門廟を呼ぶようになり、いつしか山の名となった。

張野人とともに鹿門山に入るのは、一筋の道はあくまでも幻なのか見極めるためだ。山中には鹿門寺があり、その一隅に棲んでみようという気にもなっている。張子容をそこに誘うこともあり得るだろう。張子容は難しい際にある。張子容にも転機が必要だ。

「では、行きますかな」。

張野人がぐいと棹を張る。淀んだ水の上をゆるゆると舟が動き始める。

張野人は生まれながらの漁夫ではない。それなのに、魚の獲り方も舟の操り方も並みの漁夫の域を超える。飄然と生きる世捨て人のようであり、実は強固な意志を秘めているのだろう。

水門を出て、広い河原を蛇行する細い流れを滑り、漢水の大河に乗る。張野人は棹を櫓に換える。漕ぐ姿は美しい。

今朝の漢水は穏やかだ。かつてはこの川が大氾濫を起こし、それがために歴史が大きく変わりかけた。魏、呉、蜀が天下を争っていたとき、襄陽から長江に至る平地は数丈余りの水に没した。関羽（かんう）が船団を率い、水の中に孤立する敵城を次々に落とした。ついには魏が軍事上の要としていた襄陽に迫った。曹操は、襄陽を関羽に奪われたならば、天下の情勢は敵側に大きく傾いてしまうと恐れた。関羽にとって不運なことに、襄陽攻防戦の最中に洪水はおさまり、水が引くにつれて関羽は勢いを失った。部下の扱いを誤って関羽は戦死した。

正面から朝日を受ける岷山が明るく輝いている。夜明け前の黒々とした姿とはまるで違う。世が乱れると天は災害を起こすというが、今日の山も川もこうまで穏やかであるのは、世が平穏だからなのか。残念ながらそうではない。

岷山の一角で魏元忠を見送ってから五年、魏元忠が死んでまもなく一年。世の中は厚い暗雲に覆われつつある。皇帝は位にあるだけで、韋皇后が権勢を振るっている。それに便乗して娘の安楽公主や長寧公主が大きな力を持つようになった。噂によれば、公主に三十万錢を貢ぐと、公主は誰それを何々の官に就けよとの詔を作ってくれる。その詔は一目でそれと知れるように斜めに封がしてあり、何よりも先に速やかに執行される。それによって任命された者は「斜封官」と呼ばれ、斜封官は最初に投資した分を取り戻し、さらに利を稼ぐべく、ひたすら収奪に走る。張子容の父親は、そのような勢力に接近しようとした。

安楽公主と長寧公主は、相手に負けない豪壮な邸宅を建てようと競ってい

る。安樂公主は、長寧公主を圧倒すべく、長安近郊にある昆明池を自分の邸宅の中に組み入れてしまおうと目論んで、父皇帝に昆明池をねだった。民が漁をして生きる糧を得ている池を娘が占有してしまうのは、いくら娘に甘い皇帝でもさすがに許さなかつた。ならばと、安樂公主は財と力に物を言わせて広大な民田を我が物とし、昆明池を凌ぐ池を作るべく、大地を穿ち始めた。孟浩然は首を振り、心に浮かぶ思念を追い払う。この絶好の日にこのようなことを考えるべきではない。

「あの先でひと網入れてみますかな」。

舟を中州に向ける。浅瀬に集まる鳥が、近づいて来る舟から遠くに逃れようと、風に揺れる旗のように移動する。

張野人は流れの様子を測って舟を止め、網を投じる。水中にしばし流して手元に寄せる。浮き上がって来る網の上を鳥がかすめ飛ぶ。

「あつしがいいよ欲心を剥き出しにしたので、同じく欲心を剥き出しにした鳥がやって来ましたな。欲には欲が応じる。まことわかりやすい」。

「海辺で鴟と戯れた男とは逆だと言うのですか」。

「あつしも世捨て人の真似事をしようと思ひ立つた最初のころには、無心で鴟と戯れた男のようになってみたいと思つたものです。『列子』に描かれたその寓話では、男に欲が兆した途端に、鴟が一羽も寄つて来なくなりました。兆すも何も、あつしは初めから欲心だらけですから、端から無理な話でしたな。こうして魚を獲ろうというのが大きな欲。鴟と戯れた男のようになってみたいというのもまた大きな欲。欲心を去ろうと思つうのもまた欲ですな」。

張野人は網を纏めてひよいと引き上げ、魚籠に魚をあける。

「横で見ていると、いとも簡単なようできて、誰にでもできることではありません」。

孟浩然も手ほだきを受けたものの、張野人のようにはとてもできなかった。

張野人は小さい魚をつまんで水にぽんぽん投げる。鴟が次々に来て嘴に受けて飛び去る。

「欲のおすそ分けですな」。

舟は再びゆつくりと川を下る。

峴山は姿を変え、その左手に白馬嶺が現れる。

前方に目を転じ、川の遙か下流、遠く見えるべくもない南方の洞庭湖のあたりへと思いを馳せる。いつか襄州を離れて遠く旅することもあるのだろうか。

首をさらに廻らすと、左手に山が迫る。高くまで昇った朝日の直下に鹿門山がある。

漢水を挟んで峴山と向き合う鹿門山は日に幾度となく見ている。それでも、いま目の前にあるこの山を、天下に二つとない奥深い秘境と見る。龐徳公が不老長生の仙草を摘みに入って二度と出て来なかった山だ。洞庭湖よりもむしろ鹿門山の方が遠い旅の涯にあると見たい。

町に近い峴山と異なり、鹿門山はなお太古の風を残している。舟から見ても、魁偉な形状の巨木がところどころに聳える。人の通う道は多くなく、神祠のさらに奥の絶頂に至る一筋は普段は獣だけが通るといわれる。

「しばらく先まで回りますと、川が流れ出るところがあります。そこから舟で遡れるところまで行ってみて、後は歩きですな」。

「この一日は叔父貴にお任せします」。

「山のどこを目指しますかな」。

「どこかに着かねばならぬということはありません。強いていえば、鹿門山の頂を越えて、鹿門寺の裏に出られればよいとは思っています。出らなければ出られないでよいのです」。

「成り行き次第でいいのですかな。下手をしたら、道に迷い、帰って来られなくなるかもしれませんぞ」。

「それも結構です。何なら、鹿門山に行かなくなっちゃっていいのです。漢水はこのまま下り、ついでに長江の流れも下り、金陵から揚州あたりに行き、さらには天台山にも登ってみるのも悪くはないでしょう」。

「では、そうしますかな」。

張野人は臆を漕ぐ腕にぐいと力を入れ、

「天下は広くとも、それはそれでたかが知れています。天下と鹿門山といずれが大きいのか、わかったものではありませんからな」。

張野人は、孟浩然が思っていたようなことを言う。

「それは、莊子が言っていた理屈でしょうか」。

「いま思い付いた口からでまかせです。言っているあつしにも何のことかわかりません。わからなくても言ったら言ったなりにあります。魚の楽しみだつて、わかると先に言った者の勝ちつてことですからな。どうせ本当のところはわかりっこないのです」。

「それも莊子ですか」。

「いらぬ無駄口です。あつしはいらぬことばかりを口にして来ました。天は太古の昔よりいまだ一言も発しません。あつしも黙って漕ぐとしましょう」。

張野人はことさらに唇をびったりと付けて見せる。

「いつまでその口を閉ざしておけますか、なかなかの見ものです」。

孟浩然は笑う。

張野人は、

「うん」。

と、息苦しいまでに口をつぐむ。

「叔父貴は本当に不思議です。自由気儘な隠遁者のように見えて、実際のところは、その心は謝霊雲と同じように憤懣で満たされていて、水に舟を浮かべる真の楽しみなどは御存知ないのでしょうか」。

孟浩然は口を開かせようと挑発するが、張野人はそっくり返るように天を仰ぎ、不自然な姿勢で舟を漕ぎ続ける。

「ここらまでですか」。

張野人が声を発したのは、小川を遡って、周囲が畑から林に変わろうとするあたりだ。

棹を置き、舟を木の根元に舫る。陸に上がって柴を集め、火をおこす。孟

浩然是手ごろな枝を集めて魚に通し、火の回りに並べる。いつもこのような具合だ。じきに香ばしい匂いが立つ。

「所詮あつしらは、仙草を舐め、石に苔を敷いて眠るという訳にはいきませんからな。御大層な五穀を食らって、魚でも獣でも殺めて齧り付き、藁でも絹でも何かしら被らねば眠ることもできません。厄介なものですな」。

張野人は葉に包んで来た飯を孟浩然に差し出し、煙の中から魚を取り、煤を払ってかぶりつく。孟浩然も同じようにする。

「生きるというのは確かに厄介なものかもしれませんが、これはこれで、なかなか厄介な魚です」。

舌にたくさんの小骨が当たる。注意深く選り分けて吐き出す。

「生きるために、食って、寝て、糞を垂れねばならぬとしたら、厄介なものですな。しかしですな、よく考えてみますと、食って、寝て、糞を垂れる以外に一体何かすることが他にありませんか」。

「厄介だから、この魚は旨いのかもしれません」。

「口を開いて言葉を出すといけませんな。訳もなく理屈っぽいことを言ってしまう。口は食べるためにのみ開くとしましよう」。

張野人は飯を放り込む。

龐徳公は鹿門山に入ったまま帰って来なかったという。不老長生の薬を得て、石に苔を敷いて眠るのを五百年間繰り返し、それが厄介であると感じることさえないのだとしたら、寿命を延ばすことに何の意味があるのだろうか。

道らしきものが次第に頼りなく細くなり、そのうち林中に消え、なお惰性でしばらく進むと、岩の壁が前に立ちはだかる。

「これは間違ったところに来てしまいましたかな」。

「叔父貴は、知っていてここに来たのではなかったのですか」。

「知っていたのでしょうか。思い出せませんが」。

張野人は舌を長く出す。

すつぽりと木々に覆われている。孟浩然は、重なる杪の間から光を放つ日輪を見つげ出し、

「山の頂は、たぶんこの岩の向こうになるのではありませんか」。

「ほう、坊ちゃんが知っていたのですな」。

「方角からして、そうなるのではないかと推測しただけです」。

「ならば、坊ちゃんの御指導のもと、この岩に取りついてみますかな」。

「僕は知りません」。

ごつごつとした岩の壁は、うまくすれば全く登れないものでもないようだ。

張野人は岩を。へちや。へちやと叩き、鼻を寄せて嗅ぎ回る。

「またおかしなことを。変な匂いでもするのですか」。

「龐徳公の余香がありはしないかと思いましたが」。

「五百年前の匂いがあるものですか。万一それが残っていると、叔父

貴は、龐徳公の匂いをそれと知っているのですか」。

「たぶん知っていたのでしような。いまは思い出せませんが」。

「だったら、嗅いでも無駄ではありませんか」。

「どうせわからないのなら、この匂いは龐徳公のものだと決めましょう。先に言った者の勝ちです。なるほど、この匂いですな。この明らかな証拠があるからには、龐徳公はこの壁を登り下りしているということですね」。

「要するに登ってみるのでしょう。止めませんから、どうぞ」。

張野人は腕を伸ばして岩の角を掴み、ぐいと体を引き上げる。舟を自在に操る張野人の体は頑健で、身のこなしは軽い。ひよいひよいと登って行く。

孟浩然も続いて、同じ岩の角を掴み、同じように登ろうとして、そう簡単ではない。剣の修練を止めてから腕の力が少し衰えたようだ。張野人の年齢は定かではないが、五十に近いであろうか。ずっと若い自分が付いて行けないはずがない。

張野人を追い抜いてやろうくらい勢いでしばし岩壁を登って、大きな裂け目のようなところを、身を斜めに入れ、するりと抜ける。四つん這いで進める程度の緩い傾斜になり、木の根を掴んでその上に出る。そこからは普通

に歩ける。

「ほう、ほう、これは、これは」。

張野人が跳ねるようにして進む。後を追うと、ぽっかりと開けた空間がある。明らかに人が木を切り払って作った場所だ。高みに登ると周囲の山がせり上がり、ぐるりが見渡せる。

「やはり間違えましたな。ここは鹿門山の頂ではなかったですな」。

向こうにここよりも高い峰がある。

「習郁が祀った祠はあちらの方にあるとして、ここも何かしら所縁のある場所なのではありませんか」。

「それです。だから、龐徳公の匂いがすると申しましたでしょう。ここに龐徳公が棲んでいたのですな」。

「本当ですか」。

「ほら、そこが竈です」。

「これらの石ですか。竈のようにはとても見えません。万一、竈の跡だとし

でも、変ではありませんか。龐徳公は仙草を舐めていたのでしよう。竈など使いますか」。

「仙草を煎じるのに火ぐらい要るでしょう」

「そうだとしても五百年の昔です」。

張野人は、またひくひくと鼻を動かし、

「ここは特に匂いがはっきりしています。龐徳公は、ごく最近ここにいたに違いありません」。

孟浩然も匂いを嗅ぐふりをし、

「叔父貴は次から次へと適当なことばかりおっしゃいます。ごく最近というと、百年くらい前ですか」。

張野人は腰を屈めて土地を仔細に検分し、

「何ですな、龐徳公は、少なくとも数日前、いや、もしかして今朝までここにいたのですな。我々がここに来るのを察知し、急いで姿をくらましたに違いありません。疑いの余地なしです」。

孟浩然は笑いながら、

「とすると、僕等は龐徳公に嫌われたのですか。はなはだ残念ではありませんか」。

「俗人の匂いが付くと、せつかくの不老長生術が破れてしまうからでしょうな」。

「龐徳公くらいの人が極めたのならば、僕等にちよつと出逢つたくらいで術が破れたりほしくないでしょう」。

「あつしはまだしも、坊ちゃんは欲の塊ですからな。いかに五百年保つて来ても、一遍に駄目になってしましましょう」。

「僕の欲はそれほどものですか」。

「わかりませんか、俗臭芬々で、そこらの木や草だって、嫌がついていますぞ」。

「そうですか」。

孟浩然はわざと鼻をひくつかせる。

「無駄、駄目。自分の臭いは自分ではわかりっこありません。このあつしだ

つて、どれほどの臭いを出しているのか、あつしにはわかっていません。

「では、こいつの力を借りて、僕等の俗臭を少しばかり薄めてみてはいかがでしょうか」。

孟浩然は腰に提げる瓢箪を叩く。

「それは、酒ですか。何だろうか、最初から気になっていたのです。結構なものですね。俗臭にはこれが何よりの薬です」。

張野人は腕を伸ばして勝手に瓢箪を我が物にする。

竈だと言った場所に立って天を仰ぎ、二声、三声上げ、地に酒を少しだけ注ぐ。

「これでよろしかろうと思います。さあ、飲むとしますかな」。

瓢箪を孟浩然に返す。

「何をされたのですか」。

「下界から嫌な臭いを持って来てしまったのを龐徳公に謝りまして、鹿門山に古くから住む様々な鬼神、山の精に御挨拶をしまして、それで、もしもよ

ろしかつたらここにお越しになってともに歓を尽くしませんかとお誘いし、それから臭いを取り払う呪文を唱えましてな、さらには地を浄めるために酒の力を引き出す合言葉を呟きまして、その上で

「だって、短い言葉をちよろつと発したただけだったではありませんか」。

「仙界の言葉ですから、わからないのも無理はありません」。

「叔父貴は御存知なのですか」。

「知っていましたかな。いまは思い出せません」。

「またそれですか。たまには違うことを言ってみて下さい」。

「痛いところを衝いて来ましたな。人間もこの齢になると、新しいことなどはなく、同じ繰り返しになってしまふのですな」。

「叔父貴の話ぶりにもすっかり慣れました」。

「これはいけません。酒の力を借りて、坊ちゃんの意表を衝く新たな何かを捻り出さなければ」。

張野人はまた瓢箪へと手を伸ばす。孟浩然はさっと高くに掲げ、

「叔父貴は山の鬼神、山の精を招いたのでしよう。酒はこの瓢箪がたった一つです。叔父貴が飲んでしまつたら、せつかく来てくれても差し上げる分がなくなつてしまいます」。

「鬼神というのは計り知れぬものです。漢水の水が全て酒だとして、それをすつかり飲み干しても一向に酔わないかと思えば、一滴にも満たない酒で何千何万の鬼神が酩酊することもあります。量の多寡は一向に心配ありません。ほら、御覧なさい、早くもそこにお越しになつてはありますか。いやあ、どうも、どうも」。

張野人は数歩進んで、尻が地に付くばかりに低くしゃがんで挨拶する。

「誰か来られたのですか」。

「誰でしょうか。一向にわかりませんな」。

「僕はわかつています。この秋の季節です、赤い笑みのこぼれ落ちる柘榴の精ではありませんか」。

「ほほう、そうです、そうです、柘榴の精です。呑む前からもう真赤になつ

ておられますな。さあさあ、こちらへ」。

張野人は地を払って場所を勧める。

「では、僕等も、柘榴の精に負けぬ赤さになるために吞むとしましょうか」。

孟浩然は瓢箪の栓を取り、

「叔父貴が一口で吞み干してしまふといけないので、失礼ながら、柘榴の精に代わって僕から先に」

酒を口に含んでから張野人に差し出す。

「では、あつしは誰の代わりに飲みますかな。ほう、ちようど、そこに仇なお姐さん方がやって来られましたな。一献いかがですか」。

と、口に含み、

「なぜか不服らしいお顔。わかりました、この老いぼれからよりは、お姐さん方には、若い兄さんからの方がきつといいなのでしょうな」。

張野人は瓢箪を孟浩然に回す。

「今度はどなたですか」。

「一向にわかりませんな」。

「僕にはわかっていません。だって見ればわかります。腰に宝玉を佩いておられるではありませんか。まさしく、漢皋山（かんこうざん）からお越しになった神女さんです」。

張野人は手を打つてうなずき、彼方に向かって頭を下げ、

「どうか、この坊ちゃんを色香なんぞで惑わせませんよう頼みます」。

「僕を惑わせるのはきつと難しいでしょう」。

漢皋山は別名万山と言い、襄陽の西十一里にある。かつて鄭交甫（ていこうほ）なる者が、そこに遊んで二人の美しい女性に出逢い、何もかも忘れて時を過すごした。別れ際に、楽しい交感のしるしにと、二人が身に付ける佩玉を請い願った。二人は惜しげもなく与えてくれ、鄭交甫は懐に入れた。陶然としたまま十歩ばかり進み、懐に触れると玉は消えていた。振り返ると女性の姿もなかった。二人の女性は水の神であったとされ、鄭交甫が玉を受けたと伝えられる場所には解佩渚（かいはいしよ）の名がある。

「今度、来られたのは、かなり手強そうですぞ。全部吞まれてしまいそうです」。

張野人は瓢箪を胸に抱える。

「誰ですか」。

「一向にわかりませんな」。

「僕にはわかっています。大酒飲みといたら山簡でしょう」。

張野人は手を打ってうなずき、彼方に向かって、

「今日ばかりはどうか陽気に願いましょう」。

「山簡の酒は陰気だったのですか」。

「どうだったですか。五百年前の酒宴を思い出すには酒の力が必要ですよ」。

張野人はぐいと飲む。

二人は次々に新たな鬼神、山の精を迎え、客が増えるたびに交互に呑んで
歡を尽くす。

「何をなさっているのですか。」

「叔父貴がまた一緒に来てくれるのならいいのですが、一人では迷ってしまいそうなので、目印にと。」

孟浩然は木の根元に石を積む。

酔った状態で岩壁を降りるのは勇気を要したが、幸い落ちずに元の林に戻ることができ、そこから道らしきところに出た。

「そのようにしてみましたところで、どうせ『後に遂に津（しん）を問う者なし』となるだけでしょうな。」

「桃花源と同じく、再びは訪ねて行けぬというですか。」

「坊ちゃん次第でしょうかな。行けるときは行けましょう。道しるべなどあっても役に立ちますまい。」

孟浩然是そう言われても気にせず石を積み上げる。

桃花源は陶淵明が描いた理想郷だ。

武陵（ふりよう）に棲む漁師が、溪流を奥へ奥へと遡るうちに、見たことのない桃花の林に迷い込んだ。そのまた奥に、山に開く小さな口があった。入って進むこと数十歩、俄かに広い場所に出た。穏やかな風光の里だった。村人に問うと、数百年前の戦乱を避けてここに来た者の子孫だと言う。村人は、漁師から外の世界の変転を聞き、驚き歎じた。漁師は酒食を振る舞われ、数日して外界に戻った。郡の太守は、漁師の報告を受けると、漁師が道に残した標をたどって、その村を探そうとした。しかし、どうしても見つけれなかった。その話を伝え聞いた隠者が桃花源への道を求めたが、やはり探し出せなかった。

「後に遂に津を問う者なし」とは陶淵明が桃花源について記した『桃花源の記』の結びで、津とは渡し場だ。「津を問う」とはもとは『論語』にある言葉だ。孔子も、己の理想が現実の世界においては実現しそうにないと心が揺らいだことがあり、別の世界へと渡って行く津のありかを問おうとした。

「僕は必ずまたあの場所に行きます」。

「坊ちゃんには行けませんまい」。

「叔父貴には行けても、僕には行けないのですか」。

「あつしのことはわかりません。少なくとも、坊ちゃんは、その道しるべを頼りに林の中に入ってすな、あの岩場までなら行けたとしても、岩を登った先のあの場所はきつともうないでしょうな」。

「いま降りて来たばかりではありませんか」。

張野人は両手を掲げて天を見上げ、

「龐徳公のかぐわしい香りを含んだ高風があそこには吹いていましたな。その風はいまはどこを吹いているのでしょうか。どこにもありはしません。つまりは、もともとあそこは存在していなかったのです」。

「夢だったとおおっしゃるのですか」。

「いま急に思い出したのですが、あつしはずっとここにいて、坊ちゃんのお帰りを待っていたのです。ここから林の中へは、坊ちゃんがたった一人だけ入って行かれたのです。入って行っても道はないからと何度もお止めしま

したのに、坊ちゃんは聞く耳持たずでずんずん入って行ってしまったのです。長いこと心配しながら待っていて、やっといま戻って来られたので、あつしはほっとしたところです」。

張野人は胸を撫で降ろす。

「また例の調子ですか。訳のわからないことをそうやって並べるのでしたら、いますぐに引き返して、もう一回一緒に行ってみようではありませんか。陶淵明が話にしらえた桃花源ではないのですから、あの場所はあのままです」。

「桃花源は作り話だったのですかな。違うでしょう。史書にあるのは全てが作り話だというのは誰もが知っています。それよりもすな、桃花源がいまも存在している事実の方が、よりよく知られています。違いますか。坊ちゃんが見て来たと言い張る場所は、いまはまだ存在していないのです」。

「ますます変なことを言わないで下さい」。

「聞き分けのない坊ちゃんといつまでも埒の明かぬ話をしているのは無駄で

すから、さっさと先に行くとしますかな」。

「埒の明かぬの叔父貴の方です。もう少し積み足してから行きます」。

「御苦労なことですな」。

張野人は坂を下る。

山行窮登頓

山を行くなら登り下りを窮めます

水渉尽洄浴

水を渉るなら巡るも浴うも尽します。

木々の向こうから張野人の声が響く。

例によつて謝霊雲の詩だ。これはとりわけ有名な句だ。詩を少しでも学ぶ者なら必ず知る。

謝霊雲は二十八歳のときに都から遠く離れた地に飛ばされた。失意の旅の道すがら故郷に立ち寄り、しばし郷里の山野を狂おしいばかりの勢いで巡り、数々の詩を詠んだ。

巖峭嶺稠疊

巖が削られて、峰が数多く重なり、

洲縈渚連綿

洲がつなげられて、渚が長く連なります。

そのときのこの詩こそが新しい境地を切り開き、後に山水を詩に詠もうとする者は、必ず謝靈雲の詩を学ぶようになった。

白雲抱幽石

白い雲が幽けき石を抱き

緑篠媚清漣

緑の竹が清い流れに媚びるのです。

張野人は、坂の先の見晴らしのよい場所に立ち止まって朗誦している。

孟浩然はその姿を見下ろして、張野人の意図をようやく悟る。これは挑発だ。謝靈雲のように詩を作れと言っているのだ。

一筋の道の幻は誰にも告げていない。張野人は明らかに見抜いている。俗世とは異なる場に立つ張野人には、一筋の道の入り口で躊躇している姿が見えているのだろうか。

謝靈雲には詩を詠まずにはいられない何かがあった。自分には何があるのか。

「石より湧いた白雲はどこに行ってしまうのでしょうか」。

張野人の背中に向かって、坂の途中から叫ぶ。

白雲は高潔な心の象徴だ。求めて得られるものではない。謝靈雲は、なぜ山野を歩き詩を作らねばならなかったのか。

「白雲がどこかにありますかな」。

張野人は大空を示す。

首の大きな傷が、酒で赤みを帯びたために、いつも以上に顕わである。張野人は何を追ってこのようにして生きているのか。

自分は何を悩み、何を迷っているのか。雲表觀主はもっと苦しめと言った。自分は南園に生まれて、恵まれ過ぎた歳月を送って来た。それでいて苦しむことなど何があるのか。

空には青い色があるばかりで一片の雲もない。そこに浩然の気が満ちていると、今日ここで感じることはできない。

張野人の立つ場所にまで下り、

「白雲は何ものにも阻まれることなく桃花源に行けるのでしょうか。白雲はどこにも見えません」。

「白雲に桃花源に行こうとの意志があつたなら行けはしないでしような。津を問う者は川を渡れないのです。漁師は道に迷つたから桃花源に行けたのです」。

「叔父貴は何を間違えて漁夫になられたのですか」。

張野人は振り返る。首の傷以上に恐ろしい眼で孟浩然を見る。

「たぶん『一日復た一夕、一夕復た一朝』ってことですかな」。

「今度は阮籍ですか」。

「昨日に戻るのなら、いつでも桃花源に行けましょう」。

「僕はどうしたらいいのですか。教えていただけませんか」。

「わからなかったのですかな」。

張野人はまた坂を下る。

孟浩然は決意を箆め、

「叔父貴は、僕に詩を書けとおっしゃっているのですか。そのことで迷っているのをどうして知っていたのですか」。

「石を積むのと、言葉を積むのと、どちらが無駄でしょうか」。

張野人は振り返らずに言う。

孟浩然は走って張野人の前が出る。

「僕は怖いのです」。

「怖いのはまことに結構」。

「津を問うてはいけないのですか。問う前に渡るしかないのですか」。

「何をされようとあつしの知ったことではありませんな」。

「僕はいま急にどうしようもない気分になつています。酔つたのでしょうか。今朝は待ちに待った日が来たと思いました。叔父貴とともに鹿門山に来ました。鹿門山に来ればこうなる気がしていました。でも、怖いのです。

決意するのが。それ以上に、何も決意できていないうちに帰るのも怖いのです」。

「怖いのはまことに結構。それでいいではありませんか」。

「叔父貴は、どうして僕に詩を作れとおっしゃっているのですか」

「そのようなことを誰が言いましたかな」。

「僕はこれまでにたくさんの詩を作りました。でも、心から作りたいと思って作ったのではないのです。先生に作るように言われて作ったのが大半です。友人と遊びで作ったものもあります。詩はごく身近なものでした。詩を作りたいと思ったことも幾度もあります。でも、思うような詩は作れませんでした。どうやって作ったらよいのかわからなかったのです。詩の作り方はたくさん勉強しました。そのような詩が作りたいのではないのです。僕は怖いのです。何かが猛然と渦を巻いています。詩とは何なのですか。わかってもらえないのに、どうして作ろうとしているのでしょうか。叔父貴が、詩を作れとおっしゃってくださいたら、僕は作れます。いつも誰かに言われて作ってきたからです。でも、それは僕が作りたい詩ではないのです。僕は怖いのです。だって、もしも、思うような詩ができてしまったならば、僕はどうなっ

まうでしょう。もう元には戻れません。叔父貴に連れて来ていただいたのは、そうなりたいと僕が思っていたからなのでしようか。たぶん僕はそれを求めてはいないように思うのです。でもそれははいけないのです。白雲はどこに行ってしまうのですか。桃花源はどこにあるのですか。龐徳公の高風はどこを吹いているのですか。僕は何を言っているのですか。叔父貴はわかりますか。

「一向にわかりませんな。一昨日なら、たぶんわかっていたでしょうな」。

「一昨日ではありません。今日です。いまやらなければならぬものなのでしようか」。

「またとない日にとおっしゃったのは坊ちゃんでしたな」。

「酔いが醒めたときにすっかり忘れていたのなら、そうであってほしいです」。

「山簡はそうだったですかな」。

孟浩然は口を押える。不意に出て来ようとするものがある。それを押し留めなければ。

高風邈已遠　高風は遙かにあつてすでに遠い

すでに口から出ている。

「桃花源には二度と行けぬとは限りません。龐徳公の余香はありましよう」。

孟浩然は頭を抱える。

天からだ。無数の矢が雨のように降つて来る。矢の先には肺腑を抉る言葉の鏃が付いている。その一本でも突き刺さったならば、自分は斃れるしかない。

張野人は孟浩然の脇を掴み、

「さあ、行きましよう」。

「どうして僕のことかわかるのですか」。

「坊ちゃんが何も隠さないだけです」。

■ 題鹿門山

二十歳のころに鹿門山に登ったの作。

清曉因興来 清らかな曉に、興がもととなって来ることとなりました

乘流越江峴 流れに乗って、漢水に臨む峴山の前を越えると

沙禽近初識 沙辺の鳥は、近づいて初めてそれと識れ

浦樹遙莫弁 浦辺の樹は、遠くに見わけられなくなりました。

漸到鹿門山 ようやく鹿門山に到りますと、

山明翠微淺 山は明るく、あたりは浅い靄に包まれています。

巖潭多屈曲 川は、巖と淵のたびに曲がるので

舟楫屡回轉 舟をしばしば回転させなければなりません。

昔聞龐徳公 聞くところでは、昔むかしに龐徳公が

采藥遂不返 薬草を採りに入ってついに返らなかつたといひます。

金澗餌芝木 龐徳公は不老長生薬の得られる谷で仙草を食べ

石牀卧苔蘚 石の寝床に苔を敷いて卧しました。

紛吾感耆旧 心が乱れている私は、古の人に感じ、

結纜事攀踐

纜を結び、ひたすらに攀じ登ります。

隱迹今尚存

隠れ棲んだ跡はいまも残っているのに

高風邈已遠

高き風ははるかに遠のくばかりです。

白雲何時去

白雲のように高潔な人はいつか行ってしまい

丹桂空偃蹇

群を抜く才のある人は他と関わらずに聳え立っています。

探討意未窮

深く訪ねて行く思いはなお窮まりませんが

廻艇夕陽晚

夕陽が暮れるままに舟を廻らせるのです。

■ 憶張野人

張野人の死後の追憶の詩。

与君園廬並

君の廬と我が園は隣り合わせで

微尚頗亦同

日頃思うところもまた同じでした。

耕釣方自逸

耕しても釣りをしても好むにまかせて

壺觴趣不空

酒の趣きもよろしいものでした。

門無俗士駕
人有上皇風
何必先賢伝
唯称龐徳公

門に俗人が訪れることはなく
遠く古の人の風情がありました。
なかなかどうして先賢伝に記された
龐徳公ばかりが称えられていいものではありません。

■ 峴山作

襄陽の名産である鰻魚を讃えた詩。峴山で宴を開き、鰻魚の繪で客人をもてなしたのであるだろうか。

石潭傍隈隩
沙榜曉糞縁
試垂竹竿釣
果得查頭鰻
美人騎金錯
織手繪江鮮

石潭のあたりから山は奥まった雰囲気となります
暁の岸辺をくねくねと遡って
ここというところで竹の竿を垂れますと
思い通りに鰻魚がかかります。
それを、美人が金錯刀を用いて
細い指でこしらえたのがこの鮮やかな繪です。

因謝陸内史

昔、故郷の味が恋しくて官職を擲つて帰つた者がいまし

たが、

尊羹何足伝

それとて鯿に比べたらいかほどのものだったのでしようか。

■ 答秦中苦雨思帰而袁左丞賀侍郎

最初の上京で官職に就く望みがほぼ絶たれ、折からの長雨に、帰郷することを思い、袁仁敬（えん じんけい）と賀知章（が ちしょう）に苦衷を訴えた。二人とも都の有力者で、袁仁敬は襄陽の人である。

苦学二十載

苦学すること三十年

閉門江漢陰

襄陽の家に籠つて学問に励みました。

用賢遭聖日

聖天子もとで賢人を用いると聞いて

羈旅属秋霖

故郷を離れたのですが、この秋の長雨にあい

豈直昏墊苦

水患に苦しむばかりでなく

亦為權勢沈

權勢のためにも沈まねばならなくなりました。

二毛催白髮

黒と白の頭髮は白い方ばかりが増え

百鎰罄黃金

携えてきた旅費も尽きました。

淚憶峴山墮

涙しつつ峴山の墮涙碑を憶い

愁懷襄水深

愁いて襄水の深きに懷いを巡らせませす。

謝公積憤懣

謝靈雲は憤懣を心に積んで

履舄空謠吟

山を歩いては空しく詩を吟じました。

躍馬非吾事

功名をなすのはどうやら吾が事ではなく

狎鷗宜我心

鷗と遊ぶのが我が心には合うようです。

寄言当路人

朝廷の皆様には言葉を寄せませす

去矣北山嶺

私はこれで故郷の山に帰ります。

■ 廬明府九日宴袁使君張郎中崔員外

二度目の上京から帰って後の開元二十三（七三五）年の九月九日に、廬

明府（廬僕（ろせん）、袁使君、張郎中（張愿（ちようげん）、崔員外）らが峴山で宴を開いた際の詩。

宇宙誰開闢 宇宙は誰が開いたかは知りませんが

江山此鬱盤 江山はこのように存在しています。

登臨古今用 羊祜のように昔も今も人はここに登り

風俗歲時觀 重陽の風俗は節句ごとに見られます。

地理荊州分 地理をいえばここから荊州が分かれ

天涯楚塞寬 天の涯は広々と楚の国につながります。

百城今刺史 昔に百城と言ったのは今の刺史ですし

華省旧郎官 今の華省は旧い郎官です。そうした貴顕の方々と

共美重陽節 よろしき重陽の節を共にし

俱懷落帽飲 その楽しき思いを御一緒させていただいております。

酒邀彭沢載 酒は陶淵明が飲んだものと同じでありますし

琴輟武城彈 琴は孔子の弟子が聞いたのと同じです。

献寿先浮菊

まずは菊を浮かべた長寿の盃を祝うために

尋幽或坐蘭

よい場所を選んで香しい草の上に坐しましょう。

烟虹鋪藻麗

雲を彩る虹は華麗な敷物のようすし

松竹挂衣冠

松や竹は衣冠を身に付けた立派な方々のようです。

叔子神如在

昔むかしの羊祜もまさに現れ出たようで

山公興欲闌

山簡の酔つての楽しみもたけなわとなります。

伝聞騎馬酔

伝え聞きます通りに、皆様も騎馬にまたがり

還向習池看

習池を見て酔いを重ねようではありませんか。

■ 与黄侍御北津泛舟

襄陽の近くの北津の渡し場で、侍御の職にある黄氏と舟を浮かべたと

きの詩。三十歳前後の、官職を求めると熱心だったころの作か。

津無蛟竜患

いまの漢水に昔の蛟竜の患いはなく

日久常安流

いつも安らかに流れています。

本欲避驄馬

何如同鷁舟

豈伊今日幸

曾是昔年游

莫奏琴中鶴

且随波上鷗

堤縁九里郭

山面百城樓

自顧躬耕者

才非管樂俦

聞君薦草沢

従此泛芳州

都の人が畏れ憚るようなあなた様と

どうして同じ舟に乗ることができたのでしょうか。

今日だけの幸いではなく

昔年にも同じ遊びをしています。

琴の名曲を奏するまでもなく

波上の鷗としばし上下しまししょう。

襄陽の町を巡る堤は九里に及び

城中の百の樓閣は山に対します。

私は自ら耕して生きる者で

古の賢臣のような才能はありませんが

あなた様が草沢に埋もれる者を都に推薦されていると聞

きますので

これより香しい草の繁るところへ舟を進めて行こうと思

います。

■ 初春漢中漾舟

春の初めに舟を浮かべての詩。漢皋山で仙女に逢った鄭文甫のように
時を忘れて過ごそうと友を誘ったのだろうか。

漾舟逗何処 舟を漾わせて何処へ進むのかといひますと

神女漢皋曲 昔の人が神女に出逢った漢皋山のほとります。

雪罷氷復開 雪が止んで氷の開く季節となりましたから

春潭千丈淥 春の水辺は千丈にわたって清く澄んでいます。

輕舟恣來往 そこを軽やかに舟で行き来し

探玩無厭足 どこなりと構わず尋ね入ろうではありませんか。

波影揺妓釵 波に揺れる光は、神女の釵の輝きなのでしょう

沙光逐人目 沙に反射する光が、舟にいる我等の目を追いかけて来ま

す。

傾杯魚鳥醉 杯を傾ければ、魚も鳥も酔い

得句烟花続
良会難再逢
日入須秉燭

句を得れば、烟る花も次々に開きます。
この良き出会いは再びはないのでしようから
日が落ちたならば、燭を取って、なおも続けましょう。